

SAIGUSA

元 甲府クラブ選手 三枝 志朗

SHIRO

「クラブ100年に向けて」

県民と一体となって戦っていく。
甲府クラブ時代も今も変わらない
チームの大切な思いです。

三枝志朗氏プロフィール

1942年(昭和17年)8月15日生、72歳。旧牧丘町(現山梨市)出身
牧丘第一中(現・笛川中)→日川高校→東京教育大→高校教員に。旧機山
工業高校には教員、サッカー部監督としてトータルで27年~28年在籍。
ヴァンフォーレ甲府の前身である甲府クラブには22歳~33歳頃まで在籍し
名ストライカーとして名を残す。現在、山梨学院大学サッカー部総監督の
横森巧氏とは同期にあたる。

日本で通用するチームをめざし
甲府クラブが発足

—吉岡…発足当時の甲府クラブはどんな
様子でしたか？

—三枝…甲府クラブは日本で通用する
チームを甲府につくろうと、川手良萬さん
が中心となり、いろんなところからサッ
カー好きを集めて立ち上げました。発足
当時は大変でした。専用グラウンドは
もちろんなく、借りるグラウンドに夜間
照明もなかった。小中高の体育館を
借りてやっていました。体育館ではチームの
コンピネーションの練習はあまりできず、
ほとんど練習できないまま試合に臨む
こともよくありました。

—吉岡…メンバーはどんな方々でしたか？

—三枝…教員が一番多く、お坊さんや魚屋
寿司屋、農業、銀行マン、会社員、本当に
さまざまでした。職業がバラバラなので、
練習に全員が集まれることはありません
でしたが、「勝ちたい」という思いをみんな
持っていましたし、何よりみんな好きな
サッカーをやらしてもらえる喜びがあり
ましたから、チームワークはともよかつ
たです。

「トップチームと戦いたい」
いつもその思いを抱いていた

—吉岡…今でこそ日本代表が世界を舞台に
戦い、Jリーグも人気を集めています。が、
当時のサッカーへの注目度は？

—三枝…僕が大学3年の時に東京オリン
ピックがあり、それを機にサッカーに興味
を持つ人が増えて、山梨でも関心が高まり
ましたね。僕が大学から帰って来て甲府
クラブに入った当時は、緑が丘に来るお客
さんは300人程度でしたが、勝つようにな
るとお客さんも増えていきました。

—吉岡…大学卒業後、山梨に戻ることに
迷いはありませんでしたか？日本リーグ
もでき、声もかかりましたよね？

—三枝…正直、迷いはありました。企業
チームからの話もありました。でも今
あらためて帰ってきてよかったと思っ
ています。多くの人の大切な出会いがあり
ましたから。甲府クラブでは、本当にたく
さんの刺激をもらいましたね。

—吉岡…当時はどんな思いでサッカーを
していましたか？

—三枝…当時、甲府クラブは関東リーグに
いましたが、その上の日本リーグで勝負
したいという思いはいつもありました。
1969年には全国社会人サッカー選手権
大会で浦和と同時優勝し、日本リーグの
チームとの入れ替え戦で日立製作所本社
と戦いました。いいゲームをしたんです
が2連敗しまして、その時は本当に悔しかつ
たですね。日本のトップチームと戦ってみたい
と思いましたが。

—吉岡…10年前、VF甲府が日立本社を前身
とする柏レイソルと入れ替え戦で戦い、
勝利してJ1入りを決めましたが、その時

はどんな思いでしたか？

—三枝…僕らができなかったことをやって
くれましたから、それはうれしかったですね。
あれだけのチームによく勝ったと思いま
した。J1でやりたいという選手の強い
気持ちがかもったゲームだったと思います。

たくさんの方の人の支えの中
で築かれてきた50年の歴史

—吉岡…三枝さんが活躍していた当時の
甲府クラブは、どんな戦術でしたか？

—三枝…エースストライカーはいません
から、基本はしつかり守ることですね。
トップから追いかけてコースを切ってい
て、全員で守備をする。攻守の切り替えを



インタビューア吉岡秀樹アナと、ご自宅にあったサッカーボールを持っての
2ショット。三枝氏は今でも趣味でサッカーを続けている



(1) 1970年(昭和45年)3月、台湾遠征の時のもの。前列右から3番目が三枝氏、後列左から5番目が甲府クラブ初代代表の川手氏／(2) 1970年(昭和45年)12月、入れ替え戦前の合宿にて／(3) 1971年(昭和46年)9月、関東リーグ、対見玉クラブ戦。この試合で三枝氏はハットトリックを決めた

しつかりとして、少ない失点でチャンスをものにするという戦術でした。

吉岡：今のV F甲府と同じですね。当時の甲府クラブとV F甲府を重ねあわせて見ることもありますか？

三枝：当時も今も戦術は変わっていませんよ。戦術だけでなく、チームとしての姿勢も今も昔も変わっていないと思います。山梨という小さな県の、決して大きくないチームが全国と戦っていくには、選手だけでなく、チーム全体で、山梨全体で戦わなくてはなりません。県民のみなさんにバックアップしてもらえからこそ戦えているのだと思います。

吉岡：本当にたくさんの方に支えてもらってきた50年ということですよ。

三枝：私が現役当時はみんなアマチュアでしたから、サッカーができたのは職場や家族、周りの人の理解のおかげでした。また周りの人たちの応援が選手の大きな励みになり、本当に県民のチームという感じでした。指導者にも仲間にも恵まれました。サッカーを今も楽しくできているのは、多くの人とのいい出会いや応援があったからこそ。サッカーを通して人間としても成長させてもらいました。

これからも多くの県民に愛され
夢と希望を与えてくれるチームに

吉岡：甲府クラブを受け継ぐV F甲府にこれから期待することは？

三枝：V F甲府が頑張ることによって県民が盛り上がり、子ども達も刺激を受けてレベルもアップしていきます。V F甲府がJ1で活躍することで中銀スタジアムに多くの日本代表選手が来て、生でトップ選手を見ることができるようになるのも大切なことですからね。山梨のサッカーを底上げするためにも、V F甲府にはJ1に定着してもらいたいですね。そしてこれからは県民みんなに愛されるチーム、夢と希望を与えてくれるチームであってほしいです。



自宅にあった甲府クラブ時代の貴重な写真を見せていただいた。お気に入りにはハットトリックを決めた時のもの